



マラッカ・シンガポール海峡を走るMMEAの巡視艇。この海峡の安全を守るため、日本は沿岸3カ国と共に電子海図の作成にも取り組んだ



マレーシア政府はMMEAのすべての幹部に船舶運航に必要な国際資格の取得を義務付けている

突然、船内の無線が鳴った。数キロ先の沿岸部のレーダーサイトからの発信だ。海峡を一望できる場所に設置された白い塔。レーザーカメラや無線探知器などが日本の支援によって整備され、24時間体制で不審な船などを監視している。「マラッカ・シンガポール海峡を管轄する南部沿岸の海域は、マレーシアの中でも特に難しい対応が求められる事象が多い。何事にも機敏に対応で

きるような瞬発力と的確な判断力が求められます」とアドン南部管区本部長は話す。この日は南部管区本部で、長崎克明JICA専門家（海上保安庁）との打ち合わせが行われていた。MMEAからは、毎年多くの職員が日本でのJICAの研修に参加。海上保安庁の技術を、百聞は一見にしかずで実感しており、両者の信頼関係は厚い。「MMEAは、アメリカ、ヨーロッパ、日本などの主要な海上保安組織に足を運び、自分たちに一番合うシステムを探



南部沿岸にそびえ立つレーダーサイト。MMEA職員から運用状況についての説明を受ける長崎専門家(左)

写真=安田菜津紀/studio AFTERMODE

海に囲まれたマレーシアの挑戦

どこまでも真つすぐに続く道。しばらく車を走らせていると、ふわっと潮の香りが舞った。次の瞬間、目の前に広がったのは真つ青な海。マレーシア南部の港町ジョホール・バル。真冬の日本から一転、雨期のマレーシアは蒸し暑い。視線のはるか向こう、水平線上には大型船が連なっている。その先はマラッカ・シンガポール海峡。年間約10万隻が通過する世界有数の国際航路だ。

の文字。マレーシアの海上保安組織「マレーシア海上法令執行庁(MMEA)」の巡視艇のようだ。海上保安官たちが出港の準備をしている。これから午後のパトロールに出かけるというので、乗船させてもらうことにした。国土を海に囲まれたマレーシアは、海からたくさんの「恵み」を受けている。しかしそれゆえに、海難事故なども多い。そこで2005年、マレーシア政府は海軍や海上警察など11の機関に分かれていた海上保安機能を一つにまとめるべく、新たな組織としてMMEAを設立。JICAはその準備段階から専門家を派遣し、組織の制度づくりから資機材の供与、レスキュー

「何かが起こる前に守りたい」 勢いよく走り出した黒い船は、どんどん沖へと進んでいく。8人乗りの船はとにかくよく揺れる。「何かあってからでは遅い。何かが起こる前に発見し、対処するのが私たちの仕事です」。そう言いながら、ジピン船長はハンドルをギュッと握る。隣国シンガポールは目の前だ。この広大な海峡の安心・安全が守られているのは、彼らの地道なパトロールのおかげなのだ。

「何かが起こる前に守りたい」 勢いよく走り出した黒い船は、どんどん沖へと進んでいく。8人乗りの船はとにかくよく揺れる。「何かあってからでは遅い。何かが起こる前に発見し、対処するのが私たちの仕事です」。そう言いながら、ジピン船長はハンドルをギュッと握る。隣国シンガポールは目の前だ。この広大な海峡の安心・安全が守られているのは、彼らの地道なパトロールのおかげなのだ。

マレーシア
from MALAYSIA

守る、救う、 あなたのために

マラッカ・シンガポール海峡の沿岸国マレーシアは、今から8年前、新たな海上保安組織を設立した。すべては世界をつなぐ海を守るために。現地の海上保安官たちの地道な取り組みと、それを支えるJICAの協力現場取材した。



チームの技術指導まで、海上保安庁の全面的な協力を得て支援を展開してきた。

何かが起こる前に守りたい

「何かが起こる前に守りたい」 勢いよく走り出した黒い船は、どんどん沖へと進んでいく。8人乗りの船はとにかくよく揺れる。「何かあってからでは遅い。何かが起こる前に発見し、対処するのが私たちの仕事です」。そう言いながら、ジピン船長はハンドルをギュッと握る。隣国シンガポールは目の前だ。この広大な海峡の安心・安全が守られているのは、彼らの地道なパトロールのおかげなのだ。

マレーシア海上法令執行庁の海上保安官。現在、約4,200人体制で海の安全を守る



水泳の訓練は海上保安官にとって最初の難関

世界トップクラスの海上保安組織を目指す

海の町から首都へと戻り、MMEAの航空基地へと向かった。目の前には最新の航空機が並ぶ。その運用はフランスから支援を受けているそうだ。この航空基地を統括するのは、海軍出身のベテランパイロット、ノルハイザド航空基地長。「我々の仕事は、一つとして

同じものはない。瞬時の判断力が必要とされます。それが大変さでもあり、やりがいでもあります」と語る。今後は日本での研修などを通じて、パイロットやレスキューの技術向上にも力を入れていきたいという。

この日は新年が明けて最初の金曜日。航空基地の一角では、夕方からバーベキューが行われていた。海上保安官の仕事は一刻一秒を争

う。常に神経を張りつめて仕事をしている彼らにとって、信頼できる仲間とねぎらい合う時間は大切だ。チームワークを重んじるMMEA。どの施設を訪問しても、そこで働く人々の生き生きとした笑顔が印象的だった。

「MMEAが設立されて8年、周辺海域での事故や海賊行為などは少しずつ減少しています。10年後にはアジアで、30年後には世界で

トップクラスの海上保安組織を目指します」。MMEAのアムダン長官は、そう強いまなざしで語る。2020年までに先進国入りを目指すマレーシアは、日本にとっても、海の安全を守る上で重要なパートナーなのだ。

世界をつなぐ海のために。マレーシアの海上保安官たちは、その思いを一つに、次のステップに向けて躍進を続けていく。



MMEAトレーニングセンターの正面玄関

海の未来を支える若手保安官を育てる

南部の港町ジョホール・バルから車で北上すること約6時間、北東部にある地方都市クアンタンにやって来た。海の安全の将来を担う海上保安官の育成の地だ。

2011年8月、マレーシア政府はこの街の郊外に、MMEAの

してきました。その努力と熱意には頭が下がります」と長崎専門家は巡視船艇の老朽化や人材不足などの課題に直面しながらも、周辺海域の海難事故は着実に減少している。「地域の人々や漁師、外国船の船乗りなどが、この海を安全に通過できること。私たちにとってはそれが最大の喜びです」とアドン。本部長は力強い笑顔で語った。

海の未来を支える若手保安官を育てる

幹部と一般隊員を養成する「MMEAトレーニングセンター」を新設。海上保安組織の底上げのためには、若手の人材育成が急務だったからだ。総額280億円の建設費用はすべて自己資金。アメリカや日本の教育施設の視察を重ね、アジアでもトップクラスの施設が完成した。

屋外のプールでは、ちょうど水泳の訓練が行われていた。海を相手にする海上保安官にとって、最も鍛えるべきスキルだ。

「そこ、フォームが悪いぞ!」「そこ、フォームが悪いぞ!」

「そんなスピードじゃ、助ける前におぼれるぞ!」

プールサイドから教官の厳しい声が飛ぶ。海上保安官としての使命感だろうか。どの訓練生の表情も真剣そのもの。訓練期間は9カ月。携帯電話もインターネットもない。全寮制での生活だ。「ここで学ぶのは技術だけではない。規律や仲間意識など、海上保安官として必要な素養すべてです。相当の覚悟がないと乗り越えられません」と話すのはトレーニングセンター所長のタハさん。プロ意識を一人一人にたたき込む。

「国を守る仕事に就くこと。それが小さいころからの夢でした」と話すのは、幹部候補生のナスラルさん。航空会社の客室乗務員だった彼は、26歳でこの道に足を踏み入れた。「将来はジェネラルの称号

をもらうのが夢です。道のりは長いですが後戻りはできない。がんばります」。そう語る瞳の奥には、静かな熱い思いが見えた。そしてセンターでは、女性の訓練生の奮闘ぶりも光る。まだ数は少ないが、優秀な人材ばかりだ。「ここでは男女の区別はありません。訓練のメニューはもちろん男性と一緒。同じ距離を泳ぎますし、走ります」と幹部候補生のアイタさんは笑いながら話す。イスラム教国での彼女らの活躍は、宗教をも超えた揺るぎない思いに支えられている。

2015年、マレーシア政府はアジアや中東、アフリカ諸国の海上保安組織から訓練生を受け入れることを計画。JICAも海上保安庁と協力して、カリキュラムの作成などを支援していく方針だ。「海上保安の分野では対応すべき課題も多様化している。このセンターを受け皿に、日本も含めて若手の海上保安官同士の交流を活性化できれば」と長崎専門家は期待する。



南部管区本部に勤務する女性幹部ヌルルさん。エンジニアから転身した彼女は、男性顔負けの仕事ぶりだ



「JICAの研修などを活用して学びの機会を増やし、MMEAの組織力を強化したい」と話すアムダンMMEA長官(写真提供: MMEA広報部)



訓練生や教官のためにモスクがあるのはイスラム教国ならではの



トレーニングセンター内には裁判演習所も設置されている



訓練生たちは9カ月で“陸”から“海”の人間になる